

ムズイカ ウクライナ

ムズイカというのは、音楽という意味の言葉です。

昔むかし、あるところに、ひとりの男の子がいました。この子は、知恵が少し足りないと思われていました。けれども、笛を吹くのがすばらしく上手でした。そこで、みんなから、ムズイカと呼ばれました。お父さんとお母さんからもらったほんとうの名前は、みんながわすれてしまいました。

ムズイカのうちは貧しかったので、小さいときから牛飼いの仕事をさせられました。ムズイカが、木のつるから笛をこしらえて吹くと、牛たちは、魔法にかけられたように、耳をぴんと立てて立ちどまりました。

夜の牧場^{まきば}で、若者たちや娘たちが集まってダンスをしているとき、ムズイカが笛を吹きはじめると、みんなは、静かに座りこんでしんと聞き入りました。笛の音が止んでも、だれも動きません。鳥も鳴きやみ、蛙^{かえる}も口をとじて土手の上に座りこみました。笛の音は、草原^{そうげん}や櫟^{かし}の森にあふれ、大地に広がり、空に鳴っているものを追いはらったかのようでした。

ムズイカが悲しい曲を吹くと、男も女も、若い者も年寄りも、みな声をあげて泣きました。森も櫟の木も泣きだし、雲が空から涙を流しました。楽しい曲を吹くと、みんなは仕事を投げ出して、年寄りから子どもまで、腕を組んで踊りました。櫟の木が踊り、朝焼けが踊り、雲も踊りました。みんなが踊って、みんなが笑いました。

ムズイカは、心から音楽を愛していました。

ムズイカは大きくなると、ヴァイオリンを持って、世の中に出て行きました。ムズイカがヴァイオリンを弾くと、どこの村でも町でも、人びとは仲良く幸せになりました。そして、お礼に、食べ物や飲み物、旅に必要な何やかやをくれました。

悪魔たちは、ムズイカに腹を立てました。悪魔は人間をけんかせねば生きていけないからです。

あるとき、悪魔たちは、ムズイカをなき者にしようと、十二匹のおおかみをさし向けました。

おおかみたちは、道に立ちふさがって、火のような目でムズイカをにらみました。ム

ズイカは、身を守るものを持っていませんでした。

「どうしよう。ぼくの命はこれで終わりだ。さいごに、もういちど音楽を鳴らそう」

ムズイカは、木に寄りかかってヴァイオリンを弾きはじめました。おおかみたちは、口をあぐりと開けて石のように動かなくなりました。目からは涙がこぼれました。ムズイカがひき終わると、おおかみたちはしつぽをまいて行つてしまいました。

悪魔たちは、泣いて怒りました。

「なんてこった。あいつはおおかみに魔法をかけてしまった。どうやってあいつを殺そう」

ムズイカが道を歩いていると、ふたりの若者に会いました。

「やあ、ムズイカ、どうか、わたしらの宴会でヴァイオリンを弾いてくれないか。食べ物も飲み物も、寝る所もさしあげよう」

ムズイカが若者たちについて行くと、そこは金持ちの屋敷で、たくさんの人が集まっています。たくさんのお客が、まだまだやって来ます。お客たちは、入って来ると、食卓に近寄って、鉢はちに指をひたして、目をこすっていました。

「何をしているんだろう。ぼくも試してみよう」

ムズイカは、指を鉢にひたして、目をこすってみました。そのとたん、今まで若者や旦那だんなや娘や奥さまがたに見えていた人たちが消えてしまつて、周りには、悪魔や魔女がうろうろしていました。屋敷は、屋敷なんかじゃなくて、地獄でした。

「よし、弾いてやろう。すばらしい音楽を。悪魔が焼けつくような音楽を」

ムズイカは、弾きはじめました。あつという間に、周りのものが竜巻たつまきとなつてうず巻きだしました。食卓と椅子いすは踊りだし、窓がちぎれて飛び、とびらがはずれ、壁はゆれました。くぎは一本残らず抜けて、地獄はこつぱみじんに砕け散りました。

悪魔たちは、逆さにひっくり返って、ぐるぐる回って、四方へ散っていきました。

それからは、悪魔たちは、ムズイカを恐れて、もうつきまとわなくなりました。

ムズイカは、この世をめぐり、人びとを楽しませ、慰めなぐさ、悪い人の心をナイフもなしにひきさいたのです。

おしまい

村上郁 再話